法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-12-01

<随想>英国紀行

ITO, Genzo / 伊藤, 玄三

(出版者 / Publisher)
法政大学史学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
法政史学 / 法政史学
(巻 / Volume)
38
(開始ページ / Start Page)
68
(終了ページ / End Page)
78
(発行年 / Year)
1986-03-24

Hosei University Repository

〈随想〉

英国紀行

伊藤玄三

一　出発からフラットまで

昭和六十年度法政大学海外短期留学の機会が与えられたので、かねてから希望を抱いていた英国へ旅立ったのは五月九日午後十時三十分であった。研究室メムバーの見送りの申し出があったが、近年の海外旅行は珍しいことでもないので、一切お断りした。唯、家内は成田空港を見ておき、後日の出発に備えておきたいといってついてきて、搭乗手続をした後帰っていった。それでも、卒業生で、千葉市在住の小沢清男君が近くだからといって来てくれ、しばらく見送りの時を作ってくれた。

搭乗機は日本航空のジャンボ機であり、アンカレッヂ経由ロンドン行きであった。日航機は他社のものより安全性も高かろうという信頼度もあって、遠距離飛行とはいえ不安は感じなかった。ところが、アンカレッヂ到着の段になってひどくエアシックとなった。思えば、本屋敷古墳群の調査報告の仕上げの事や会津の田島町史原稿の作成の為の疲労やらで、いささか弱っていたことは確かであった。アンカレッヂ空港のロビーを心許なく前屈みで歩く孤独さは、この先の旅への不安をかきたてること甚しいものであったといえよう。止むなく、カウンターの職員にトラベルミン二錠とコップ一杯の水を依頼し、しばしベンチに休みをとった次第であった。アンカレッヂからは、エアシックの悪化を恐れて眠ることを心懸けた。薬のせいもあってか、その後は眠り続けてロンドンのヒースロー空港まで無事であった。その間、食事も抜かされたことをボンヤリと覚えているが、敢えて要求する気にもなれなかった。ヒースローには、現地時間十日六時三十分頃着陸し、入国手続も簡単に済んだ。唯、この手続の行列の中で、多数の黒人達と一緒であったのが異国を意識させたと同時に、英国という国への第一歩としては奇妙に違和感を覚えたところであった。しかしそれは、ロンドン市中の生活の中ではごくありふれた多人種の国として解消していく性質のものであった。

Hosei University Repository

ヒースローには、既に留学中の英文学科の小谷洋一教授が迎えに来て下さるということになっていた。「出迎えが遅れても、待っているように」と言われていたので、ミーティングポイントの椅子に座り、側に旅行カバンを置いて待つこと約二時間、九時頃に小谷教授が見えられてホッとした。早速朝食を取り、赤塗りの二階だてバスで市内のホテルへ向った。車窓の風景は新鮮なものであったが、時折薄いピンクの桜の花が見られたのには驚かされた。桜の花が英国でもこのように咲いているとは意外であったけれども、後にスコットランドの旅ではネス湖の北側斜面の道端の並木にまで桜樹を見る機会があり、いささか認識をあらためさせられた。ホテルに荷物を置いた後には、直ちにこれからしばらく滞在する為の貸部屋を探す為に街へ出た。小谷教授の案内で、不動産屋「ジャパンサービシズ」を訪ね、手頃な部屋を紹介してもらい、下見をした上で、そこに決めることにした。このフラットレットがロンドン、N・W・3、スティールズロード十八番地であり、その街路の南側に連なる建物の中程の、日本流では三階の路の後側の部屋であった。しかし、街路に面してはいなかったが、はるかにロンドン市中心部が窓外に望まれる見晴しの良い部屋で、かすかにリージェント・パークの樹々を越えて国会議事堂の尖塔も見え、後にはロンドン大学本部の大きな建物も確かめることが出来た。当に、朝夕ロンドンの街をのぞんで暮し、時には黄金に輝く夕日のロンドンを眺めながら夕食をとるという贅沢を味わうことができた。一週四五ポンドという部屋代の割合には都心にも近く、便利でもあった。このフラットレットでは炊事・シャワーの設備もあり、日本製白黒テレビ（サンヨー）、電話もあった。不便といえば、トイレが室外の階段下にあるのが唯一の不便であった程度である。家主は、ロンドン大学の The London School of Economics and Political Science で経済を学んだというアイルランド出身の人物であり、白髪小柄な老紳士であった。気さくな性格であり、一週間後には友人との昼食に招待してくれ、その後も数度にわたってお茶にも呼んでもらい、グッド・ホスピタリティに接することができたのも幸であった。彼、Geoffrey McKeeman 氏とは、帰国後も文通が続いている。

このフラットレットで、ロンドン生活三ケ月余を過すことになったのである。

二　ロンドン市内の見学

フラットレットが都心に近いこともあって、しかも地下鉄 Northern Line の Chalk Farm か Belsize Park の両駅からの便がよかったので、毎日ロンドン市街に出歩く好運には恵まれた。地下鉄六駅を南下すれば Tottenham Court Road 駅であり、大英博物館もそこから五分程の距離であり、ロンドン大学もその一、二駅手前で降りて歩ける範囲であった。その利点は又逆に、余り周縁部に行く機会を失くしたことにもなったようである。

市街で良く訪ねたところといえば、やはり大英博物館であろう。五月の下旬から六月初旬にかけては殆んど毎日のように出掛けて、陳列品を見、レクチャーに参加し、映画やスライドの興味

Hosei University Repository

あるものには出席してみた。陳列品解説の行事にも、面白そうなものには参加して、展示資料をゆっくり見ることにつとめた。特に、英国の考古学的資料は極力観察した。何せ、膨大な大英博物館の資料を丹念に見ているには時間が限られているので、主として英国中心に学ぶことにしようと考えたのである。しかし、実際のところ大英博物館の展示資料では英国のものが多いわけではなく、かつての大英帝国時代の世界的な蒐集品が多彩に存在していたといえるだろう。勿論、英国出土品では優れたものがならべられているのであり、特に青銅器時代以降の資料には注目された。ケルトからローマ時代にかけての金・銀器などは、ヨーロッパ大陸からの文化伝播を良く示すものであり、しかもローマ時代の遺物・遺跡の様相は、まさにローマ征服下の大きな文化的変換を示して余りあり、予想外のものがあった。かつて三十年前の学生の時に、考古学洋書講読において学んだ英国の古代の様相をはるかに越える印象を与えられ、やはり現地で一見に如くはないと感じたことであった。それにしても、英国に対する大陸からの幾つかの民族の侵入が、文物の上で明確になることかくの如きものであるとすれば、翻って日本列島への大陸・半島からの文化伝播の荷担者への理解は、これまで通り重視しなくとも良いのか、征服説的理解まで進めるべきなのか困惑せざるを得ない。そして、その英国での確たる大陸からの侵入者の足跡は、ローマ時代の都市・城壁などに最も典型的であり、英国諸都市の起源はこのローマ時代に置かれるのである。後に、幾つかのローマ時代遺跡を訪ねる機会があった時に、その事実は良く理解できた。加えて、英国の中世遺跡出土品にも素晴しいものがあり、サットン・ホー Sutton Hoo の舟葬の遺品などは驚きであった。

大英博物館の多くの資料にいささかうんざりし、レクチャーなどにもマンネリ化を覚えた頃、同じようにレクチャーに参加した東大OD土居通正君を知り、彼の案内でロンドン大学 Institute of Archaeology を訪ね、製本の行き届いた図書室を見ることができた。実は、出発前に国際交流委員会の山崎さんにお願いして、このロンドン大学考古学部のブラック氏（渉外担当）に大学からの依頼状を出してもらっていたのであるが、全くのナシノッブテであった。そこで、麻布台のロンドン大学日本事務局を訪ね、そこの中村氏にテレックスで問い合せていただいたら、確かに文書は届いているから、いつでも来て宜しいとの事であった。そこで、到着後にロンドン大学 School of Oriental and African Studies (SOAS) の Anglo-Japanese Enterprises に佐藤幸夫氏を訪ね、アポイントメントをとっていただいたが、不在だ、休暇だといって、遂に手紙も電話もうまく通じなかった。英国流では一週間位待たされるのは普通ですよといわれているうちに、大学は夏期休暇に入り、ロンドン大学での活動は諦めた方が良かろうと判断された。むしろ、自由に博物館などを見る機会が得られる好機とばかり、そこで市内や各地の遺跡や博物館をまわることに変更したのである。

ロンドン大学にも、そのような博物館が所属しており、SOAS所属の The Percival David Foundation of Chinese Art は実に豊富な中国陶磁のコレクションがあり、The Courtauld

Hosei University Repository

Institute Galieriesはすぐれた絵画等の名作を有する大学所属の美術館であった。かつて、これらのコレクションは日本にも渡って展覧会が行なわれたものがあり、売り場の絵ハガキには便利堂製のものも売られていた。考古学上では、ロンドン大学にはかの著名なチャイルドも教鞭をとっていたし、エジプト学のペトリーの豊富なコレクションもある。The Petrie Museum of Egyptian Archaeologyを訪ねた時も、教授達は皆休暇で不在であったが、キュレーターの方が親切にしてくれたし、嫌という程エジプトの土器や玉類を見せられた。因みに、このコレクションを残したペトリーは英国最初のエジプト学者であり、彼に学んだ浜田耕作が京都大学の考古学講座の初代であり、日本考古学に基礎を与えたことは周知のところである。これらを見て、ロンドン大学の規模の大きさも思わせられたが、それと共に、これらの豊富な資料をもつ博物館や美術館を有して教育・研究に携わっている場の恵まれた環境を見るにつけ、法政大学のそのような施設の無さが痛く感ぜられたところである。

その他の博物館や美術館としては、The Natural History Museum, The Geological Museum, The Science Museum, The Victioria and Albert Museum, The National Gallery, The Tate Gallerryなど国立の施設は見て歩いた。これらの施設は、無料で入館できるものが殆んどであり、利用するのに気持良いものがあった。大英博物館もそうであったが、国立美術館にも屢々出掛け、著名な絵画をゆっくりと鑑賞できたのは嬉しい限りであった。特に国立美術館では、水曜日には夜八時まで開いているので、食堂で夕食を摂って再びベンチへ座って名画を鑑賞して帰ったことも数度にのぼっている。入場無料であるからこそ行けたと思う。自然史博物館や地質学博物館には、考古学的資料もあり、時には意外なところで遺物の展示に出遭うこともあった。

その点では、The Museum of Londonも面白かった。ロンドンの歴史的資料を陳列しているこの博物館は、ロンドンの大文化施設を有するBarbicanの一角にある。特にここで興味をひいたのはローマ時代のものであった。ロンドンは、ローマ時代にはLondiniumと呼ばれた町を基礎としており、このシティの地域がその遺跡の上に存在している。その遺跡からの出土品が陳列されているのであり、ローマ時代の生活をうかがわせるものがあると共に、東側の窓外には城壁の遺構も見ることができる。勿論、眼下の城壁遺構の見えているところは中世以降のものであり、ローマ時代の遺構はその下部に埋もれている。このローマ時代の城壁Roman City Wallは、ロンドン塔まで延びて、南側はテームズ川に沿っていて不整長方形状を呈する。ロンドン塔を基点とする城壁めぐりのコースWall walkがあることがわかったので、日曜日の一日を一人で歩いてみた。ロンドン塔内の南側には掘り出されたローマ時代城壁基底が東西方向に見られるが、それが屈折して北へ向い、所々に調査で判明した状態で見られるように露出させてあった。それをたどっていけば、先のロンドン博物館まで到着する。途中では、地下道の壁面に城壁基礎の断面が表示されているところもあり、遺跡の存在を具体的に教えていたのは印象的であった。この城壁めぐりでは、老人グループなどもナップ

Hosei University Repository

ザックを背負って元気良く表示板をたどっており、史跡に対する市民の関わりがとても好感がもてた。時にはこちらが道をたずねられたりし、地図を広げて大弱りの事もあった。このロンディニウムの建設は、紀元四三年にローマ人が侵入後にこの地に拠点を作った後、同六〇年のブーディカ女王（イケニ族）の叛乱などを経て、ローマ都市としての形を整えていった。現在知られているのは、城壁内にはバシリカ・砦・公衆浴場・街路などの遺構であり、幾つかのモザイクなどである。大英博物館のローマ室の壁面を飾っている「虎に乗るバッカス」の著名なモザイクもその一つである。このロンディニウムも、五世紀初めにはローマ人の撤退に伴ない衰えていったらしい。

ロンドンは、良くいわれるように公園が多い。博物館などの帰りに気が向いた時、リージェント・パークやハイド・パークをまわってみたこともある。確かに広い芝生と季節の花々は目に新鮮であった。それと共に、公園や街路にプラタナスやトチが大きく延びているのも落着いた風景であった。特に注目されたのは、トチの木 Horse chestnut であり、この樹が街路樹としてこれほど植えられているとは知らなかった。日本では山中にあるトチの木が、英国では大きな街路樹として並び、丁度白い花や赤紫の花が咲いている盛りであり、帰国の頃には径三～四センチの実がついていた。そういえば、プラタナスも沢山の鈴をぶらさげており、後にはそれが落下して潰され、街路に茶色の繊維をばらまいていた。それにしても、季節に応じてバラ・チューリップ・ゼラニウムなどの花が豊富なことは、心地良い限りであり、花に対する長い伝統があるのだろうと推測された。

花の美しさや、広い庭園という点では、比較的早く訪ねたハンプトンコートパレスの The Pond Garden は、写真などで良く紹介されているものを目前にして、感激ひとしおであった。十六世紀初めにウルジイ卿によって建てられたものがヘンリー八世に提供され、次第に規模を増していった宮殿である赤煉瓦の建物群も、チューダー建築の一典型として素晴しいと思ったが、それよりもむしろ広い芝生の庭園と三角帽子形に刈り込まれた樹々のたたずまいが印象深かったことは確かである。宮殿では、ウインザー城やバッキンガム宮殿のように現在王室が用いているものにあってもそれぞれ庭園をもち、建物と良くマッチした作りがなされている。ヨーロッパを含めて、これらの宮殿のあり方と貴族・王室の富裕層の隔絶した姿もまた歴史理解の蒙を大いに啓いてくれるものであった。そう思ってみれば、ロンドンの大きな公園なども、元来は王室や貴族の所有であったものであり、狩猟の場などとして用いられてきたものであった。フラットレットから近かったハムステッド・ヒースなどの自然の残された広大な公園の歴史的変遷を知れば、日本では余り想像できなかったこの地の歴史的背景がうかがえるような気がしたし、それが公園として存続利用されていること自体に唯々感嘆するだけであった。因みに、このハムステッド・ヒースの東のハイゲート墓地にはマルクスの墓があり、大きな頭部の像が見られる。中国の趙紫陽首相が来訪したというローカル新聞の記事と写真があったので、その中訪ねてみようと思っていたが、遂に果せなかった。

Hosei University Repository

ストーンヘンヂにて

三　各地への小旅行

ロンドンがかつてローマ時代のロンディニウムである如く、地方の都市のスタートもまた多くローマ時代の都市・城砦に起原を有している。その種のもので最初に訪ねたのは、ブリストルに近いバース（Bath）であった。小谷教授の御家族と大和運輸ロンドン支店の中村氏の御家族達に同行の機会を与えられ、二台の車でストーンヘンヂとこのバースを訪ねたのである。Stone henge については、既に日本で本を見、スライドを作ったこともあったので、それ程強い感激はなかった。丁度夏至が近づいていたので、ヒッピー達がここで集まりをもとうとして多数集まってき、トラブルがあったことは新聞・テレビで垣間見ていた。その為、ここを訪ねた時には近くの道路には警官が立ち、ストーンヘンヂのまわりの畑には有刺鉄線が目新しい渦巻をめぐらせていた。ストーンヘンヂの周堀の外側にも綱が張られ、きめられた通路からしか眺められないストーンヘンヂは、写真の姿と近いものでしかないのは残念であった。石の細部や加工痕、問題の地中海型の短剣の様子などが、もっと間近に見たかったところである。それにしても紀元前一八〇〇年頃から同一五〇〇年頃まで大きく三期に区分されるこの石柱列も、発掘の結果では木柱列などもあったことを示しており、径九〇メートルの堀の内側に整然と復原された姿を想像すると驚異的である。その用いられている石材も、ブリストル海峡を越えた遠隔地から運ばれたものがあり、その労働力

Hosei University Repository

St. Albans のローマ時代劇場跡

の動員や社会構成も予想外のものがあったと指摘されているのは周知であるが、今の殺風景な牧場風景からその当時の様相を推測するすのは仲々難しいと思った。年代的には新しい段階となろうが、付近の丘陵には点々と古墳の存在が見られた。この古墳の存在からすれば、この地域が古代の有力な社会の見られたところであったことが想像されるのは、極めて特異な遺跡存在の背景にも連なるだろうとは想像したところである。そして、実は、このストーンヘンヂからさほど遠くないところにはウッドヘンヂの遺跡もあり、石柱ならぬ木柱が用いられていた場合もある。恐らく石柱は特別な例であり、木柱を用いた幾つかの遺跡が他にあっただろうと容易に想像できるところであった。

さて、バースの話であるが、ここには今尚豊富な鉱泉が湧き、十八世紀には上流社会の進出があり、その頃の街並が良く残り、ロイヤルクレッセントの如き当時の大規模な半月形の都市住宅などまで見ることができる。しかし、この街の起原はローマ時代の温泉街として始まった。その遺跡は現在のアビイ・チャーチ付近の地下で発掘され、地下博物館として見ることができる。浴場の遺構や多くの遺物からみると、辺境の谷間の温泉にまで及んだローマ文化の強さを良くうかがうことができる。

ローマ時代の遺跡を訪ねる小旅行は、次にはロンドン北方の St. Albans の郊外の Verulamium であった。ここでは、ローマ都市の城壁遺構が良く残っており、また劇場の遺跡は印象的であった。後に訪ねたチェスターの劇場跡よりははるかに小規模であったが、ローマ人の進出とはかくもローマ文化移植を強く残す

Hosei University Repository

ものとなっていたのかと強く思わされたところである。遺跡の中央部ではハイポコースト（床下暖房）の遺構が良く残り、上面の花模様のモザイクもそのまま見ることができた。残念なのは、ここに到達した時にはフイルムが終ってしまい、写真が撮れなかった事である。この遺跡は、一時ローマの英国進出の中心拠点ともなったところであり、博物館の展示資料にも興味があるものが多かった。各種のモザイク、壁面装飾、各地からもたらされた土器類などには、その後の参考になるものが幾つかあった。

ローマ時代の遺跡を訪ねる旅は、ヨークにまで延ばした。この街の York Minster の地下にはローマ時代の遺構が横たわっている。基礎や装飾壁面その他が部分的に見られた。勿論、現在の荘麗な寺院の下には十一世紀や十三世紀の遺構も重複しており、その歴史的積みかさねがうかがえるように配慮してあることも注目された。夕暮れに、帰りの時間を気にしながら城壁を一人トボトボと歩いていたら、反対から来た女性にどこから来たのかとたずねられた。そして、感心なことだ、といわれたが、孤独な夕刻の城壁めぐりも、ここまでロンドンを離れていると心細い限りであった。

実は、ヨークに出掛けたいと思ったのには別の理由もあった。家主のマッキーマン氏が六月十五日のサンデイタイムズの切抜きをくれたのである。それには、'Digging for the Iron Age Chieftains' とタイトルがあり、ヨークシャのドリッフィールド近傍の一墳墓で初期ケルトの戦車を伴う若い女性の埋葬が発掘されており、九月には大英博物館のチームが発掘を計画しているというものであった。戦車(chariot)自体は英国でもイングランド・アイルランドで発見されているが、多くは紀元一世紀頃以降、即ちローマ征服以降である。ところが、シーザーが英国に侵入した時には二頭立戦車が用いられているのを見ているので、既にそれ以前からこの種の戦車は使用されていたことになる。フランスでは、紀元前五―四世紀の墳墓から戦車が発見されることを考えれば、大陸のケルトの一派（多分パリシ族）がヨークシャ方面に侵入しているので、この地域のケルト的文化の戦車はこの時期頃から伝えられているかも知れない。そして、英国の他地域に先立ってこのヨークシャー地域では戦車も副葬することになったのであろう。そのような古段階の戦車例で注目されると共に、この墳墓では凡そ二五歳の若い女性が埋葬されていた。これは、副葬品の豊富さとも関連させて考えれば、この地の女王であった可能性があるといわれる。それを推測させるのは、その後三〇〇年程したローマ征服時に、ノーフォークにはイケニの女王ブーディカやヨークシャーのビイガンテスの女王のカルチマンドアなどの女王が君臨していたことである。そのような女王の伝統をさかのぼることができるとすれば、このパリシ族の社会においても女王がいたことが推測できるということになる。今回発掘が予定されている墳墓は、今述べた砂利採掘で偶然発掘された女性の墳墓の二倍の大きさであるといわれ、戦車も二台は入っているかも知れないし、より重要な首長墓である可能性があると書かれていた。この発掘がどういう成果を得たのかは知り得ていないが、英国への大陸文化の伝播にも幾つかの多様な姿があることが見られるようで

Hosei University Repository

あり、ここでもまたケルトの具体的な侵入などが課題となっている。そこで、ヨークの博物館などで戦車の資料を見ることができないかと考えたのであった。しかし、未だケルトの戦車資料は多くはなかった。

又、ローマ時代の大形の劇場が知られるチェスターにも出掛けた。チェスターも現在の街の下にローマ時代の城壁をもつ町が埋もれているが、劇場は城壁外にあった。アリーナをとりまく壁面の赤色の積石は、復原されたところも多少はあるようであったが、よく整っていたし、石材も大きなものが使われていた。ここでも観覧席は平らな芝生となっており、線状の表示で見学の便がはかられていた。確かにローマの中心部における石積みの整然たる劇場とは異なり、英国では観覧席などは木製のものもあったことが調査されているが、それにしてもローマ都市の構成パターンは徹底しているというべきであろう。加えて、この劇場遺跡と城壁（現在のものは新しいが、その下部にローマ時代の基礎が所々に見られる）の間にローマ庭園と称されるものがあった。緑の芝生に円柱及び柱座などが並んでいるその庭園は、これが英国のものとは思えない錯覚をおこさせるに十分であった。このチェスターの遺跡は、特にローマ時代の墓碑が豊富な内容をもつ点で注目されている。墓碑の表面の人物・動物などの表現はやや稚拙の感は免れないとしても、このウェールズ地方の重要拠点に活躍した人々の姿をうかがうには有力な資料を提供している。博物館では所狭しと墓碑が並んでいた。

博物館という点で是非行っておきたいと思った一つはカーディフの The National Museum of Wales であった。この街もローマ時代に基礎を置かれたところである。偶々日曜日に出掛けた為に、二時半から五時までしか見ることができなかったが、考古学的資料にウェールズの特徴がそれ程強く感ぜられなかった。いうまでもなく、先史時代の石器の点では石材にも特色があるけれども、その後は絶えず外からの文化が影響してきていることがむしろ見られた。ケルト的文化の残存などをもう少し読みとるべきかも知れないが、それはまた The Welsh Folk Museum などの見学も加えなかった為の意識差であったろうか。街を歩いているとウェールズ特有のスペルがあって、多少イングランドとの違いを覚えたけれども、他には天候が急変して風雨となり、三十分程 University College の階段下に身を縮めていた寒かった思い出の方が強い。

これらの遺跡や博物館めぐりの他には、オックスフォードとケンブリッヂを訪ねている。オックスフォードは二度出掛け、The Ashmolean Museum や The University Museum を見、著名なクライストチャーチなどをめぐり歩いた。アシュモリーン博物館は、大学の博物館としてみれば非常に良好な資料を多く有する点で注目される。このような博物館がある大学は本当に恵まれているだろうと思った。

その点では、ケンブリッヂにも The Fitzwilliam Museum や The New Museums の中の The Archaeological and Ethnological Museum などあって、特に考古学民族学博物館の場合には、良く一室の陳列を密度高く配慮してあり、勉学にも一般にも

Hosei University Repository

便がはかられていて好感がもてた。いうまでもなく両大学共恵まれた大学街の環境の中にあるわけであるが、やはり歴史的伝統も加わった良好な資料が具わっていることがうかがえ、わが法政大学のそれらの欠如がますます痛感されたところである。

四　スコットランドへの旅

八月一日になって、サベナ航空で妻子が到着した。スコットランド旅行が求められていたので、二泊三日のコーチツアーに出掛けることにした。ヒースの覆うスコットランドの風景だけでは得るものが少ないだろうと思っていたが、スコットランドにはスコットランドの歴史があった。キングスクロス駅から夜行列車でエヂンバラへ行き、翌朝のバスで出掛けるという強行軍であったが、バスには四組も日本人が乗合せたのには驚いた。ロンドンでは日本人が結構多いと思ったが、スコットランドの旅までかく多いとは意外であった。このツアーは、スコットランドの西北方をまわるコースであり、恵まれた天候で風景は大いに楽しめた。

印象深かったものとしては、Loch Linnheに向うところのGlen Coeの谷間が一つであった。ここは、一六九二年二月十三日に有名なグレンコウの大虐殺があったところである。スコットランド高地の住民達は、敗北亡命したジェームズⅡ世に代って王位に着いたウィリアムⅢ世とメアリへの服従を喜ばなかった。しかし、政府は服従の期限を一六九一年十二月三十一日と設定して宣誓させ、恩赦を約束した。ところが、グレンコウのマクドナルドはその宣誓を最終まで遅らせ、止むなく遂に北方のフォートウイリアムへその意を伝えるべく赴いたのである。ところが、そこには宣誓書を受領すべき責任者が居ないということで、更に南方遠くインバアレイへ行くことを余儀なくされた。彼の宣誓書が二、三日後にエヂンバラに到着した時、国務次官ダリムプルは、これ以上高地地帯で軍事行動を続けるだけの資金もないことを考慮して、高地首長層に恐怖を与えて従わせようと策する好機と考えた。そこで、「銃火と剣」の書簡が送られることになった。表面的にはウィリアムⅢ世の命令という形で、それまでグレンコウの谷間の住民達の間に宿営していたグレンリオンのキャムベル大尉の率いる兵士達が突如として友好的に過していた住民達を襲ったのである。大虐殺は夜明けに突然はじまったという。約二〇〇人の住民をキャムベルと一二八人の兵士達が襲い、四〇人以上が殺害され、数人はさらし者として死に、その他にも犠牲が生じた。唯、この少部族は盗賊であるという悪名もあり、嫌われている面があったという。それにしても、意外な虐殺の真相は不明瞭なものがあったが、三年後のスコットランド議会はこれを明らかな謀殺であるとした。しかし、ウィリアムⅢ世はダリムプルをかばい、解職したのみで罪を処理した。けれども、この事件は明らかに弁解できない汚ならしい虐殺であったことは確かであろう。結果としては、スコットランド高地人達への見せしめとし、イングランドからの支配の強化がはかられ、一七〇七年の両国の統合への道が進められ、連合王国が成立したのである。その道筋での一つの事件の舞台が、美しい山に囲まれたグレンコウの谷間であっ

Hosei University Repository

たのである。

このツアーでは、ドラムドラチットというネス湖のほとりのホテルに泊った。ここから北東のインバネスの東方には Culloden Moor が広がっている。この地は、一七四六年四月十六日にスコットランド独立の最後の戦いが展開されたところであった。僭称者チャールズとカンバーランド公の軍隊がここで戦い、チャールズを支援したスコットランド軍は敢えなく破れた。この平原にはそちこちにハイランドの人達の墓石も点在しており、スコットランド人の無念さが偲ばれるような気持にうたれた。この戦いの後、スコットランドの民族的風俗なども禁止され、イングランド化が徹底していったということであった。スコットランドにとっては忘れがたい歴史の刻まれた土地である。

この戦跡を見てまわっていた時、カナダから親子三人で来ていたロイド・スミス氏が、一つの墓石の前をきれいにしようとしていた。どうしたのかといったら、この墓が先祖の墓だという。そこで、写真を一枚撮って過日送った。その先祖とのつながりは詳しくわからなかったが、英国からカナダへ移民した人達などには、スコットランドの地でのかつての戦いに一族や先祖が関わっていたことも多かろうと感銘を受けた次第であった。

五　帰途へ

ロンドンでは、沢山の方々の世話になった。そして、無事帰国することができた。まだまだ見るべきものがあったし、各大学の研究状況なども、夏休みがぶつからなければ見たかったと思ったが、次の韓国への旅の準備もあるので帰ることにした。家主のマッキーマン氏は、帰国に際して私達親子三人に一冊ずつ本を贈ってくれ、涙を浮べて別れを惜しんでくれた。本当に良い人達に接することができた。もう一度機会を得て訪れたいと思っている。

帰途は、エールフランスでパリ経由で飛び、エアシックにもかからず帰ることができた。あの快適な気候のロンドンにくらべて、東京は蒸し暑い夏が続いていた。

法政考古学　第10集　記念論文集

昭和60年3月発行

臨海沖積平野の地形と古代遺跡の立地……市瀬由自
インダス文明の船……小西正捷
縄文時代石器研究の視点と方法……阿部朝衛
縄文前期集落の構造……小薬一夫
縄文貝塚出土釣針における漁獲選択性の応用（試論）……石川隆司
千葉県八日市場市大堀遺跡出土の独鈷石と他2例…小澤清男
小形器台形土器をめぐって……小出輝雄
地域古墳文化の変遷……伊藤玄三
武蔵国における鉄鏃の型式分類とその編年的予察…鶴間正昭
高市大寺・大官大寺の造営過程……星野良史
高坏をめぐる諸問題……比田井克仁